天文学とプラネタリウム

www.tenpla.net

vol. 211

☆高梨 直紘（東京大学）／平松 正顕（国立天文台）

今月のお題

宇宙に遊ぶ

私たちはなにを目的に観望会をするのか。それは宇宙に遊ぶためである。江之浦で月を見ながら、そんなことを改めて考えてみました。

「月だっ!」という声に弾かれるようにして東の地平に目を向ければ、そこには赤くもったりとしたなにものかが、地面に張り付くようにして鈍い輝きを放っています。長方形に潰れたその姿は、ふだん見慣れている月とは似ても似つかぬもの。はたしてあれが月なのか、一瞬の逡巡があった後、あのような光を放つものは月以外にはないという消去法によってそれをやっと月と認めた人が、あちらこちらでひとり、またひとりと「月だ……」とつぶやいています……。

秋風もすっかり涼しくなった10月の末、私たちは小田原の西にある江之浦測候所にいました。ここは、現代美術家である杉本博司氏が作り出した不思議な空間。氏の作品だけでなく、彼の下に集まってくるさまざまなモノが居場所を与えられ、そこかしこに飾られています。「天空のうちにある自身の場を確認する作業」こそがアートであるとの考えから<測候所>と名付けられたこの場所は、宇宙との繋がりを強く意識したデザインになっています。そのようなこともあって、この江之浦測候所が2017年にオープンするにあたっては、国立天文台がその記者会見の場所として選ばれました。私がその記者会見の実現に協力したご縁があって、この場所で観望会を実施することになったのです。

このような場所での観望会は、私たちにとってのチャレンジでもあります。学校での観望会、科学館での観望会、プラネタリウムでの観望会。これらはいずれも、教育や普及の文脈から観望会の目的を設定し、それに沿って内容をデザインすることもできます。商業施設での観望会や観光施設での観望会、病院での観望会などもやはり、それぞれの文脈から観望会の目的を設定できるでしょう。しかし、アートの場での観望会は、難しい。いったいなにを頼りに観望会の目的を設定するのが適切であるのか。私たち自身の星空に対する考え方そのものを問われていると言っても良いでしょう。

今回、私が選んだ答えは「自分を呼び覚ますこと」でした。私が思うに、私たちが星空を見上げた時に感じるなにかは、とても大事なものです。これは言語化できません。その部分や断面を切り取って言葉にすることができても、それはその感動の全体を汲み取れない。そのように私は感じています。絵画や音楽、舞踊など、アートに分類される非言語的な表現の方が、その本質により迫れる手段だと思いますが、やはりすべてではありません。しかも、その感じ方は人それぞれのはず。私は私の、あなたにはあなたに固有の感じ方があって、それは重なる部分もある一方で、まったく違う部分もあることでしょう。夜空を見上げた時、星空から受ける複雑ななにかを要素分解せず、そのまま受け止めてみる。自分というフィルターを通して世界と接した時に、なにを感じるのか。逆に言えば、その時になにを感じるのかで、自分自身をより深く理解する手がかりとすることができるのではないか。そういったことに、星空を眺めることの価値があると考えたわけです。

でも、これは考えてみれば別になにか特別なことを言っているわけではありません。私たちがふだんやっている観望会に感じている楽しみの中には、ここで述べたようなことがおのずと含まれているでしょう。もちろん、私たちの観望会だけではありません。読者の皆さんが主催されている観望会や、参加している観望会にも、そういった要素が必ず含まれていることでしょう。もっと言えば、これは観望会だけに限る必要がある話でもありません。講演会やプラネタリウムを見に行った時、宇宙の番組を見たり本や雑誌を読んだ時、綺麗な宇宙の写真を眺めた時。それぞれの時に動かされる心があります。その動かされようを通じて自分自身を知るというのが、宇宙に遊ぶことの大事な目的であるということを改めて考えさせられた機会となりました。

この日は好天にも恵まれ、相模湾の向こうから出てくる月を皆で眺めることができました。